

日本におけるキリスト教と伝統的宗教の 救済方法の相違点についての一考察

A study of the differences between Christian and
traditional religious methods of salvation in Japan.

佐々木 謙 一
Sasaki Kenichi

はじめに

筆者の研究テーマは、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」についての考察である。『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』において、日本における「悪魔祓い」について調査し、その結果、東北地方の613のキリスト教会の中に26が「悪魔祓い」を行っていることを明らかにした。また、それを行う聖職者の話を分析することによって、その特徴と実態と構造を考察した。¹

そして、考察の結果、それまで明らかにされてこなかった、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」の特徴と実態と構造を明らかにしたのであるが、他の宗教における「悪魔祓い」（これ以降、救済方法とする）とそれを比較して論じるまでには至らなかった。過去の研究においても、そのような考察が行われることはなかった。

他の宗教における救済方法と比較し、その相違点を整理することは、今後、日本のキリスト教「悪魔祓い」の研究を続けていく上で、非常に重要であると考えられる。なぜなら、他の宗教における救済方法と比較することで、キリスト教における「悪魔祓い」をまた違った角度から分析することができるからである。

これらの問題意識から、『日本のキリスト教と民間巫者の救済方法における相違点についての一考察』²において、日本の民間巫者であるイタコ、カミサマ、ユタ、を取り上げ、それらが行う人々への救済の方法を分析した。そしてその結果、民間巫者とキリスト教聖職者の救済方法の違いが、宗教者自身が特別な能力を持つことへの考え方と、神や超自然的な存在の救済の仕方についての考え方にあるということが明らかになった。

今回の論文においては、このことを踏まえて、日本の伝統的宗教である修験道、真言宗、神道、日蓮宗を取り上げ、それらが行う人々への救済の方法を分析する。そして、これらの考察分析の結

¹ 佐々木謙一（2023）『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』（博士論文，東北大学）。

² 佐々木謙一（2024）『日本のキリスト教と民間巫者の救済方法における相違点についての一考察』静岡英和学院大学『紀要』第22号，pp.11-26。

果得た資料と日本の基督教「悪魔祓い」を比較し、その相違点を明らかにする。

第1章 救済という言葉の定義と日本の東北地方における基督教「悪魔祓い」の方法

論文『日本の基督教と民間巫者の救済方法における相違点についての一考察』において、日本の民間巫者と基督教の救済方法の相違点を明らかにするために、「救済」という言葉について定義し、日本の東北地方における基督教「悪魔祓い」の方法について整理した。

ここでは、日本の伝統的宗教と基督教の救済方法の相違点を明らかにするために、それらをもう一度確認する。

一般的に「救済」という言葉は、人間が苦しい状況から解放されて、至福の状態になることを意味している。また、それは広義と狭義に分けることができ、とくに、狭義の中でも最も一般的なタイプの「救済」を「神や救い主といったものをたててその力によって悪や罪そして死などから解放を求めるといったもの」と考える。そして、このようなタイプの「救済」は超人間的な存在を創り出し、それに従ったり、それに対して祈ったりすることによって救われるとされる。また、このことを踏まえて「宗教者が人びとをその苦しみから解放する仕方、つまり、方法」を「救済方法」として定義した。³

また、日本の東北地方における基督教「悪魔祓い」の方法は、医者や医療機関と連携をとらず、依頼者に神を信じる気持ちを持たせてから、聖職者一人のみで行われる。そして、「行う」側と「依頼する」側に信頼関係が生じたときに初めて成功するといった特徴を持つ。⁴

以上のようなことを踏まえて、日本における伝統的宗教の救済方法を考察し、それと比較分析することによって、違った角度から東北地方における基督教「悪魔祓い」を論じる。

第2章 修験道の救済方法

2-1 修験道の祈禱

修験道とは、日本における古来からの山岳信仰である。また、それは、山に籠り厳しい修行を行うことによって、「悟り」を得ることを目的としている。この修験道は、日本における独特な宗教として続いてきたが、次第に仏教に取り入れられていった。また、平安時代後期において、修験道の宗教者たちは、聖⁵また山伏と呼ばれた。山伏は密教の験者の中でも山岳で修行した宗教者を示すが、修行して験を修めたことから修験者とも呼ばれていた。⁶

³ 同書, pp.11-12.

⁴ 同書, pp.12-13.

⁵ 日本において諸国を回遊した仏教僧のこと。その語源は仏教伝来以前の民間信仰の司祭者とされ特にこれを指して民俗学上では「ヒジリ」とも表記される。

⁶ 宮家準 (2015) 『修験道小事典』法蔵館, pp.7-8.

また、このような修験者たちは、人びとにとって病気や苦しみを対処してくれる有難い存在であった。そして、その対処方法を後に伝えていくためにまとめられたものが「祈禱」である。⁷

修験道の「祈禱」を行うには、あらゆる存在に対して、謙虚な気持ちを持って接し、懺悔の心、法を信じる心、師を信じる心、自己を信じる心を持つことが求められる。そして、謙虚で、おおらかな心を持つことによって、はじめて、神仏が人々に与える恵みや幸運を得ることが出来る。このようなことから、それを得るために修験者は修行を行うのである。⁸

また、修験道における全ての礼拝対象は、大日如来の化身である。大日如来以外のことは、認められない。よって、「祈祷」を行う修験者も、される側の依頼者も、大日如来の位に到達し、そこに位置しなければ、靈験の妙を得ることは出来ない。⁹

そして、修験道における全ての「祈禱」は、仏の働きや行いに他ならない。つまり、それは大日如来の働きそのものである。このことこそが、修験道の「祈禱」の本質である。¹⁰

また、修験道における救済儀礼は、その災いの原因を知ることから始まる。それは、卜占や巫術、そして憑祈願などによって行われる。災いの主な原因は、依頼者が方位の禁忌を侵したことによる祟り、咎祖霊・荒神・稲荷などの祭祀を怠ったことによる祟り、生霊や死霊、そして動物霊が、憑依したことによるとされる。

次に、災いの原因を取り除くために、息災護摩、諸尊への祈願、小祀の祭りなどの「除災儀礼」が行われる。この「除災儀礼」は、3種類の神格と同化、そして使役し、邪神や邪霊を制御することによって完成する。¹¹

また、「除災儀礼」にはいくつかの祈禱法がある。そして、それは本尊を祀ったり、お札を貼ったり、薬を処方したり、他人や社会のためになる行いをしたり、霊に対して謝罪、または、仏法を説いたり、九つの文字を唱えたりして行われる。このような祈禱法の中で、災いの原因となった霊に対して、謝罪、または仏法を説く祈禱法は、特定の修行をおこなった人間に限って行われる。また、九つの文字を唱える祈禱法は、必ず師匠・先達から伝授を受けてから行いなければならない。¹²

また、これらの他に「憑きものおとし」という祈禱法がある。それは、病気や不幸などの原因を、憑きものが憑いたことによると判断し、それを取り祓う祈禱法である。¹³

そして、この「憑きものおとし」にはいくつかの方法がある。それは、憑きものに対してその非を教え諭して立ち去るように強制したり、問答をして相手をこらしめて逃げ出させたりする方法、人形などを作りのとして弓を射たり、刀で威嚇することによって退散させる方法、取り憑かれたとされる人間自体の仏性を開発し、同時に崇拜対象と同化した修験者が五鈷杵や崇拜対象の力によって、威嚇して物怪（邪気）を退散させる方法、憑きものに対して元の住処へ帰るように諭したり、

⁷ 伊矢野美峰 (2004) 『CDブック修験道—その教えと秘法—』 大法輪閣, p.72.

⁸ 同書, pp.82-83.

⁹ 同書, p.81.

¹⁰ 同書, pp.81-82.

¹¹ 前掲書 宮家準『修験道小事典』, p.15.

¹² 前掲書 伊矢野美峰『CDブック修験道—その教えと秘法—』, pp.73-81.

¹³ 前掲書 宮家準『修験道小事典』, p.126.

人形に憑依霊を移して水に流すなどして送りかえす方法、修験者が不動明王と同化し崇拜対象に憑きものをおとすように祈念する方法などである。¹⁴

修験道は、このような考えを基に、信者や依頼者の依頼に応じて救済儀礼を行っている。

2-2 修験道の救済方法

修験道の救済方法をまとめるために、ここで、図を示す。図1は、修験道の救済方法を図示したものである。

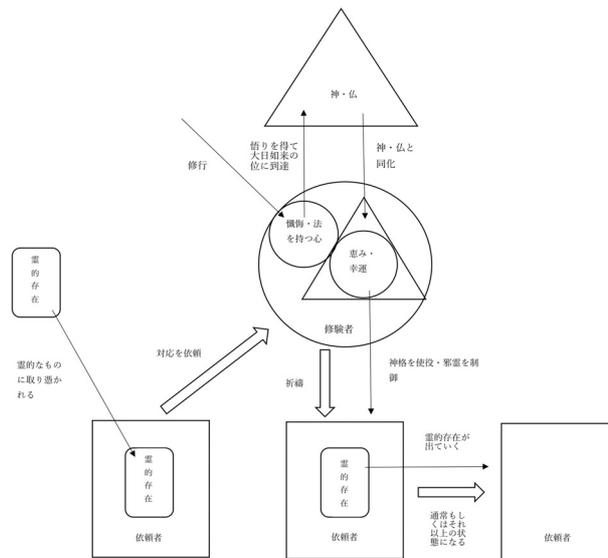


図1 修験道の救済方法

修験道は、山に籠り、悟りを開くために厳しい修行を行う。この厳しい修行を経験することによって、修験者は、懺悔する心や法を信じる心、また師を信じる心、そして自己を信じる心を持つようになる。そして、このような心を持つことによって、神仏が人々に与えて下さる恵みや幸運を得ることが出来る。それが、形として表されるのが「祈禱」である。ここで重要なことは、その「祈禱」が仏の働きや行いそのものであるということである。

そして、病気などの苦しみをもつ依頼者が修験者に対応を依頼する。依頼された修験者は、儀礼を行う。この儀礼の中心は「祈禱」である。そして、重要なことは、この儀礼は、修験者が神格と「同化」し、また、それを「使役」し、邪神や邪霊を「制御」することによって、完成することである。つまり、修験者は神仏である超自然的な霊的存在を体の中に取り入れ、一体となってそれを行うのである。そして、修験者の「祈禱」によって、依頼者の苦しみの原因である霊的な存在が取り扱われる。そして、依頼者は元の通常の状態、もしくは、それ以上の状態になる。このように修験道の救済方法は示される。

¹⁴ 宮家準（編）（1986）『修験道辞典』東京堂出版、p.255.

第3章 真言宗の救済方法

3-1 真言宗の祈禱

仏教におけるいくつかの宗派の中で、呪術に対して最も重要な位置づけに据えているのは真言宗である。真言とは、「真実の言葉」という意味をもつ。しかし、通常、一般の人間が捉えているような意味での「真実の言葉」ではない。それ自体が仏・菩薩やそれらのはたらきを示している。このようなことから、真言という言葉を考えて、それは、「呪文」という言葉に置き換えることが出来る。そして、その「呪文」は、即身成仏をはたした行者が唱え、加持¹⁵すれば、人びとの願いを実現することが出来るとされている。¹⁶ つまり、真言宗とは呪術の宗教であり、「密教」として位置づけられる¹⁷。

また、真言宗において「祈禱」は、呪文や真言、また経文を唱えることによって行われる。そして、それは神や仏によって起こされる霊験・加護・利益・救済を期待する宗教的行為である。¹⁸

ここで、「祈禱」について定義する。つまり、「祈禱」とは、人間が超自然的な霊的存在の力に対して働きかけることによって、それを人間に有利に介入させることを目的とする呪術・宗教的な行為を示す¹⁹。

また、真言宗は「祈禱」を体系化している。そして、それは災害や苦難を除去するため、幸福や健康を招来するため、人間の心に慈愛の念を起こさせるため、悪人や悪心や邪霊を駆逐し抑圧するため、本尊などを勧請するために行われる。つまり、「祈禱」は呪術的・現世利益的な側面と宗教的・救済論的な側面の二つを統合したものである。²⁰

また、真言宗において「祈禱」が行えるのは特定の者だけであり、師匠から弟子へ個人的に教えるを伝えることが重んじられる。中でも、「加持祈禱」は、修行を積むことによって能力を得た僧侶が、さまざまな依頼に応えるために、仏の加護と助力を祈る儀礼である。そして、「加持祈禱」を行う者は定められた姿勢をとり、口にたえず呪句をとえつつ、心を一つに集中しながらそれを行う。また、修行者は、次元を超えた仏の力を受け入れることで、その力が発揮される媒体となる。そして、仏の力がそこに発揮されて、さまざまな超常的効果が現われる。²¹

また、真言宗においてさまざまな「祈禱」が行われる。その中で注目すべきものは、狐の霊に取り憑かれた人間からそれを取り祓う「祈禱」である。それは、九字を切りながら、自分自身が不動明王と一体となった姿を思い浮かべながら行う。不動明王の印と真言を修した後に、剣印で足の裏

¹⁵ 密教で仏の慈悲の力が衆生に加わり衆生がそれを信心によって受持し仏と衆生とが相応すること。

¹⁶ 真野俊和（1986）「まじないの聖〈総説〉」萩原龍夫・真野俊和（編）『仏教民俗学体系2 聖と民衆』名著出版、pp.359-360。

¹⁷ 同書、p.360。

¹⁸ 山折哲雄（1987）「祈禱」梅原猛他（編）『密教小辞典 講座密教第5巻』春秋社、p.44。

¹⁹ 同書、pp.44-45。

²⁰ 同書、p.45。

²¹ 湯浅康雄（1989）「総論」井上光貞・上山春平（監修）湯浅康雄（編）『体系：仏教と日本人3 密議と修行 仏教の密儀性とその深層』春秋社、pp.30-33。

(男の場合左の足、女の場合右の足)に鬼の文字を5カ所書き、さらに額に不動明王という種字を書き、狐の霊が祓われるまで真言を唱えることによって行われる。²²

また、真言宗の「祈禱」には「憑もの落とし」も存在する。真言宗では、「憑もの」を病気の種類と考え、取り憑かれた人間に対して「憑きもの落とし」の「祈禱」を行うと、効き目が表れるとされている。²³

3-2 真言宗の救済方法

真言宗の救済方法をまとめるために、ここで、図を示す。図2は、真言宗の救済方法を図示したものである。

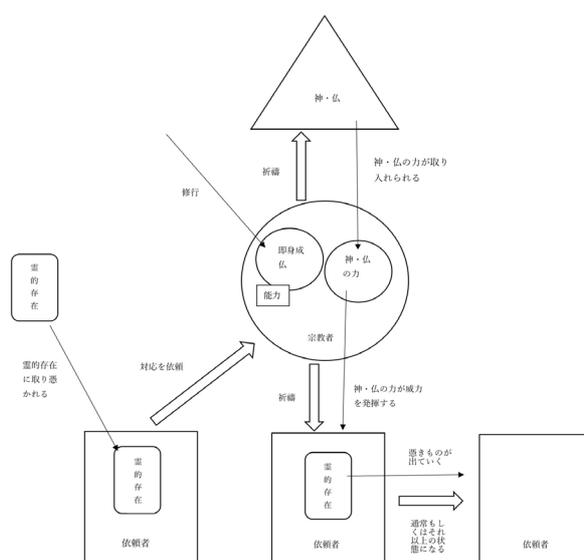


図2 真言宗の救済方法

真言宗の「祈禱」を行う者は、修行をすることによって即身成仏を果たす。その即身成仏を果たしたことによって、人びとの願いをかなえることが出来る特別な能力を持つ。そして、病気などの苦しみを持つ依頼者が宗教者に対応を依頼する。依頼された宗教者は、「祈禱」することによって、仏とされる霊的な超自然的な存在の力を身体の中に取り入れる。それを取り入れたことによって、宗教者自身の身体は、仏の力を表す一つの媒体となる。そして、仏とされる霊的な超自然的な存在の力によって、依頼者に取り憑いている病気などの原因である霊的な存在を取り祓う。そして、病気などの原因を取り祓ってもらったことで、依頼者は元の通常の状態、もしくは、それ以上の状態になる。このように、真言宗の救済方法は示される。

²² 豊嶋泰國 (2002) 『図説憑物呪法全書』原書房, p.121.

²³ 同書, p.5.

第4章 神道の救済方法

4-1 神道の儀礼

神道の「祓い」は、重要な儀礼である。それは対象である人間の災い、穢れ、罪などを取り除いて心身を浄める行為である。また、それは災い、穢れ、罪などを紙や幣²⁴で祓ったあとに売却したり、人間の身代わりとして、紙で作った人形に移して、川に流したりする仕方で行われる。このような「祓い」の儀礼は、もともと神に対して行われた行為であり、対象の人間がそれまでに行ってきた無礼な行為を償うことと、神の心をなだめることを目的としている。そして、この「祓い」は古事記と日本書紀の神話に基づいている。それは、罪を犯したものに賠償を出させることによって、罪を赦すという儀礼に展開した。²⁵

このように、神道において「祓い」は、重要な儀礼として位置づけられているが、その「祓い」にはいくつかの方法がある。そして、その代表的な方法は、「生霊・死霊・動物霊の祓除」、「墓目の法」、「憑きものおとし」である。

「生霊・死霊・動物霊の祓除」は、神職が祝詞を唱えることにより、依頼者が通常ではない状態になり、袋の中へ息をはかせ、その袋を川か海へ流すか氏神に置いてくることによって、行われる²⁶。

また、「墓目の法」は、依頼者に生霊が取り憑いている場合、男女間において三角関係を解消したり、離婚を希望したりする場合、また、病人の命を取り留めたいと願う場合、失くしたものを探す場合などに用いられる。また、この方法は、夜中たいてい午前2時から30分くらいのみに行われ、最長で7日間行われる。この方法は、人形を作り、それを祓う対象に見立てて、「祝詞」を唱えながら矢を射ることによって行われる。そして、「九字」を切りながら行う。また、集中力を高めて、精神を統一して行わなければならない。²⁷

また、「憑きものおとし」は、祝詞をあげて祈念することによって行われる。そして、喝を入れ、20分「祈禱」することで、正気に戻るとされている。また、「憑きもの」は、再発しやすいために、3回くらい「祈禱」を繰り返すこともある。そのために、「祈禱」のときに依頼者（憑きもの）に対して、また来るか、来ないかを尋ね、来ないということを「憑きもの」が言うまで問い詰めることが大切である。²⁸

4-2 神道の救済方法

神道の救済方法をまとめるために、ここで、図を示す。図3は、神道の救済方法を図示したものである。

²⁴ 白紙を切って柄にはさんだ神祭用具。

²⁵ 谷口貢（1998）「祓い」佐々木宏幹他（監修）『日本民俗宗教辞典』東京堂出版，p.468.

²⁶ 長谷部八朗（1992）『祈禱儀礼の世界－カミとホトケの民族誌－』名著出版，p.62.

²⁷ 同書，pp.65-66.

²⁸ 同書，p.66.

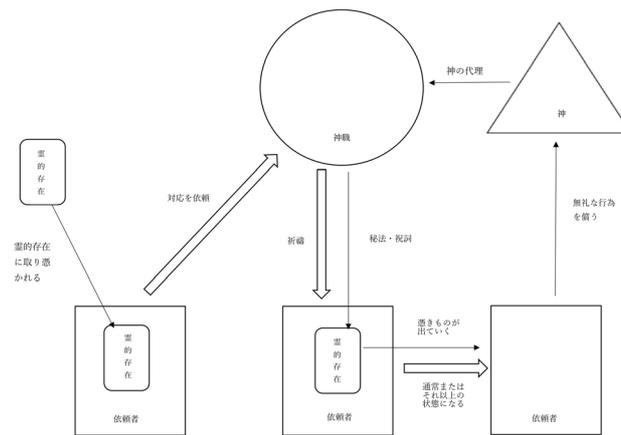


図3 神道の救済方法

神道では、災難や病気の原因である霊的な存在は「祈禱」や「儀礼」によって取り祓われる。宗教者が修行を通して特別な能力を得ることによって、それを取り祓うのではない。

また、その「祈禱」や「儀礼」には伝統的な秘法があり、それによって災難や病気の原因である霊的な存在を取り祓うが、この場合、修験道や真言宗の場合と違って、宗教者に超自然的な霊的存在が乗り移ったり、力が入ったりすることはない。

神道の救済方法は、病気などの苦しみを持つ依頼者が、神職に対応を求めることから始まる。対応を求められた神職は、「祈禱」によって、依頼者に取り憑いている病気などの原因である霊的存在を取り祓う。また、この「祈禱」は秘法を具えている。そして、病気などの原因を取り祓ってもらったことで、依頼者は、通常の状態、もしくは、それ以上な状態になる。神道の救済方法はこのように示される。

第5章 日蓮宗の救済方法

5-1 日蓮宗の祈禱

日蓮宗は、仏教の一つの宗派であり、法華宗とも呼ばれ、鎌倉時代中期に日蓮によって興された。その日蓮宗の「祈禱」は、他の宗派や宗教のいろいろな要素を取り入れて、咀嚼しながら独特な形へと作り上げていき、きわめて多彩な性格を有している。²⁹

また、日蓮宗の「祈禱」は、木剣を使用することから、密教色を有している。なぜなら、木剣は、密教の「祈禱」において使用されるからである。そして、日蓮宗において、修法師を「験者」、「験僧」、「修験者」と呼ぶ。また、日蓮宗には、修験道において用いられる「寄加持」や「不動金縛法」といった「修法」を行う修法師が存在する。このようなことから、日蓮宗は、修験道の影響を受けているとされる。そして、「祈禱」を行う時に「幣束」を用いる。この「幣束」は神道において用

²⁹ 同書, p.16.

いられる。このようなことから、日蓮宗の「祈禱」は、神道からの影響も含んでいるとされている。このように、日蓮宗における「祈禱」は、いろいろな宗派や宗教の要素を取り入れて行われる。³⁰

また、日蓮宗の修法師は、病気や災難の原因である霊的存在と会話をしたり、その姿を見たり、声を聞いたりする。そして、修法師は、人間に取り憑いているそれを「教化」させる役目を持つ。

「教化」とは、病気や災難の原因である霊的存在に対して非を論し、怨念を捨て、本拠へ帰り、善神（霊）と化して、邪心を抱いた相手を守護することを説得することである。また、死霊であると判断されれば、迷いを捨て去り、恨みを翻して、「成仏」することを勧めることである。このように修法師が行う「祈禱」の手法は、邪霊・疫神を単に祓うのではなく、「教化」を通して、納得せずに去らせるといった特徴がある。³¹

また、仏力と信力と経力（法力）の3つの力が感応することによって、修法師に加持の力が具えられ、修法師が「祈禱」することによって、菩薩が利益を与えてくださる。ここで、重要なことは、加持の力を具えるためには、信力や行力を高めなければならないということである。そして、その信力や行力を高めるためには、自己の「因縁」や「罪障」を取り払う必要がある。また、「因縁」や「罪障」を取り払って、はじめて「守護神」が定まる。修法師の「祈禱」の能力は、如何にこの守護神と交流するかによるとされるのである。³²

しかし、これを行う場合、修法師だけに頼るのではなくて、依頼者本人も題目を唱え、供養を重ね、自己の「因縁」、「罪障」の消滅をはからねばならない。なぜなら、災いを被るのは、被る側にも原因があるとされているからである。³³

また、病気や災難の原因を取り祓う祈禱法は、修法師が単独で行う場合と、寄り代³⁴を立てる場合の2種類がある。後者の場合、それは「寄加持」と呼ばれる。

また、日蓮宗には「祈禱」において3つの門流がある。中でも、「正中山流」に関連する「中山法華経寺」は、祈禱修法の霊地としてその中心的存在となっている。³⁵

「中山法華経寺」は日蓮宗の本山の一つであり、祈禱本尊鬼子母神を祀る寺として知られている。また、「中山法華経寺」の祈禱法は、呪文を唱えることによって行われる。そして、それは病気や災難の原因である死霊などを祓うものである。³⁶

また、この祈禱法は、「憑祈禱」と呼ばれ、100日間の「荒行」を行った僧侶が憑座³⁷と組になって行う「憑もの落とし」である³⁸。

³⁰ 同書, pp.16-17.

³¹ 同書, pp.20-21.

³² 同書, p.22.

³³ 同書, p.52.

³⁴ 神霊が依り憑く（よりつく）対象物のこと。

³⁵ 前掲書 長谷部八郎『祈禱儀礼の世界—カミとホトケの民族誌—』, pp.19-20.

³⁶ 宮家準（1993）「仏教と修験道」仏教民俗学体系編集委員会（編）『仏教民俗学体系 1 仏教民俗学の諸問題』名著出版, p.124.

³⁷ 人間を媒体とした神の依り代のこと。多くの場合子供が憑座になるのに適していると考えられ、昔の神事では憑座を使ってご神託を受けるといったものがあった。この他にも病気を治す方法として憑座に病の原因となる悪霊を移して治療することもある。

³⁸ 佐々木伸一（1988）「シャーマンの類型：日本および周辺地域に関して」『族：ヤカラ』7, pp.11-12.

このように、「中山法華経寺」にとって、「憑物落とし」の「祈禱」は、信者や依頼者を「救済」するための重要なものである。

5-2 日蓮宗の救済方法

ここで、日蓮宗の救済方法をまとめるために図を示す。図4は、日蓮宗の救済方法を図示したものである。

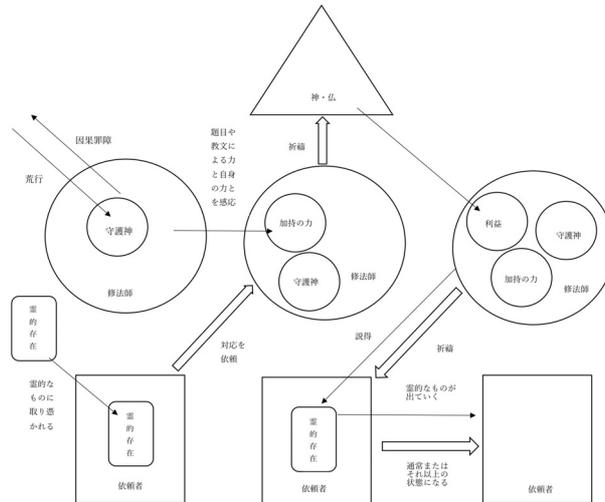


図4 日蓮宗の救済方法

修法師は、「荒行」を行うことによって自身の因縁や罪障を取り除き守護神を得る。そして、守護神を得た上で、題目や经文による力と自身の力とを感応させることで、加持の力を具える。そして、病気などの苦しみを持つ依頼者が修法師に対応を求める。対応を求められた修法師は、「祈禱」することにより菩薩から利益を与えてもらう。そして、守護神、加持の力、利益を具えた修法師が「祈禱」することによって、病気などの苦しみの原因である霊的存在を説得し取り祓う。そして、病気などの原因を取り祓ってもらった依頼者は、通常の状態、あるいは、それ以上の状態になる。日蓮宗の救済方法はこのように示される。

結論

ここで、今まで述べてきたことを踏まえて、日本のキリスト教と伝統的宗教における救済方法の相違点を一覧表にまとめる。

表 1 日本のキリスト教と伝統的宗教との救済方法の相違点一覧表

	伝統的宗教				日本のキリスト教
	修験道	真言宗	神道	日蓮宗	
宗教者は修行を行う	○	○		○	
宗教者は特別な能力を持つ	○	○		○	
宗教者は超自然的な霊的存在と接触できる能力を持つ	○				
依頼者が相談する	○	○	○	○	○
宗教者は超自然的な霊的存在と接触する	○				
超自然的な霊的存在の力や利益が宗教者の体の中に入る		○		○	
宗教者は超自然的な霊的存在を体の中に取り入れ一体となる	○				
宗教者は特別な能力によって依頼者から直接病気などの原因を取り除く	○	○		○	
宗教者は祈ることで神の力によって依頼者から直接病気などの原因を取り除く					○
秘法を持つ祈禱によって病気などの原因を取り除く			○		
宗教者は守護神を持つ				○	
宗教者は依頼者に取り憑いている霊的存在を説得する				○	
依頼者から病気や苦しみの原因が取り除かれる	○	○	○	○	○
依頼者は通常の状態もしくはそれ以上の状態になる	○	○	○	○	○
依頼者に正しい生活をすることをアドバイスする					○
神のために救済を行うことを目的としている					○

日本のキリスト教と伝統的宗教の救済方法の違いは以下のようにまとめられる。

- ・ 修験道、真言宗、日蓮宗の宗教者は、「修行」を行うが、キリスト教聖職者は「修行」は行わない
- ・ 修験道、真言宗、日蓮宗の宗教者は、特別な能力を持つ人間になるが、キリスト教聖職者は特別な能力を持つ人間になることはない
- ・ 修験道、真言宗、日蓮宗の宗教者は、霊的な超自然的な存在を体の中に取り入れたり、力や利益をもらったり、一体となったりするが、キリスト教聖職者は、霊的な超自然的な存在を体の中に取り入れたり、力をもらったり、一体となったりすることはない
- ・ 修験道、真言宗、日蓮宗の宗教者は、自身の特別な能力によって依頼者から直接病気などの原因を取り除くが、キリスト教聖職者は、祈り願うことで、神に依頼者から病気などの原因を取り除いてもらう
- ・ 神道の宗教者は、秘法を用いることによって効力を持った「祈禱」や「儀礼」を行い依頼者から直接病気などの原因を取り除くが、キリスト教聖職者が行う「祈り」は神にお願いする一つの方法であり、また「儀式」はそれを体系化させたものにすぎないので、それ自身には効力はなく、あくまでも祈り願うことで、神に依頼者から病気などの原因を取り除いてもらう
- ・ 日蓮宗における宗教者は、「守護神」を持つが、キリスト教聖職者は、「守護神」的なものを持つことはない
- ・ 日蓮宗における宗教者は、依頼者に取り憑いている霊的存在を説得させようとするが、キリスト教聖職者は、「悪魔」や「悪霊」に対して説得させることはなく、一方的に神の力によって取り除く
- ・ 修験道、真言宗、日蓮宗・神道の宗教者は、依頼者から病気などの原因を取り除くことで救済を完結するが、キリスト教聖職者は、依頼者から病気などの原因を取り除いた後、依頼者に正しい生活をすることをアドバイスする

- ・修験道、真言宗、日蓮宗・神道の宗教者は、依頼者のために救済を行うことを目的としているが、キリスト教聖職者は、神のために救済を行うことを目的としている

修験道、真言宗、日蓮宗の宗教者は、修行することによって特別な能力を得、超自然的な霊的存在と接触したり、その力や利益を自身の体の中に取り入れることによって、病気などの原因を取り除き依頼者を救済する。また、神道の宗教者は、修行をして特別な能力を得ることはなく、超自然的な存在の力や利益を借りることもなく、秘法による「祈祷」や「儀礼」を行うことによって、病気などの原因を取り除き依頼者を救済する。

これらのことを分析すると、修験道、真言宗、神道、日蓮宗の宗教者が行う「救済」において共通していることが、超自然的な霊的存在の力や利益を借りるにしろ、秘法による「祈祷」や「儀礼」を行うにしろ、いずれにおいても宗教者自身が病気などの原因を取り除き、依頼者を救済することにあるということがわかる。

一方、キリスト教聖職者は、特別な能力を持つことはなく、超自然的な霊的存在の力や利益を借りることもなく、秘法による「祈祷」や「儀礼」を行うこともしないで、神に祈り願うことによって、神に直接、病気などの原因を取り除いてもらい、依頼者を救済してもらおうといった方法をとる。つまり、その救済の主体は神であり、キリスト教聖職者自身が行うことではない。

このようなことから、伝統的宗教の宗教者とキリスト教聖職者の救済方法の最大の相違点が、宗教者自身が行うのか、また超自然的な霊的存在が行うのかというところにあることがわかる。

救済において、伝統的宗教にとって、自身が特別な能力を持つことや秘法を用いること、つまり、「技法」が何よりも重要となる。つまり、この救済の重要性は、宗教者自身が行うことにある。しかし、キリスト教の場合は、そのような能力や秘法、つまり、「技法」は必要としない。重要となるのは、自身の神への信仰のみである。

このようなことから、伝統的宗教の宗教者とキリスト教聖職者の救済方法の違いは、宗教者が自ら行うのか、超自然的な霊的存在が行うのかにあると筆者は考える。つまり、それは宗教者の「技法」と「信仰」という言葉で表される。

このように、伝統的宗教とキリスト教の救済方法は異なっているのだが、これらの相違は、民間巫者とキリスト教の救済方法を比較してその相違点を考察したときと同じように、宗教そのものの違いからきていると筆者は考える。

キリスト教がこのような救済を行う根底には、唯一全能の神という概念がある。キリスト教は、神にはできないことはないと考えることから、人間、とくに、聖職者がその救済に関与する余地はないのである。その主体は神自身であり、人間、とくに、聖職者は祈り願うだけの存在であるとされる。

結論として、伝統的宗教とキリスト教の救済方法の違いは、宗教者が自ら行うという方法を取るのか、超自然的な霊的存在に行ってもらおうという方法をとるのかにあると筆者は考える。

おわりに

冒頭でも述べたように、筆者の研究テーマは、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」についての考察である。『日本の東北地方におけるキリスト教「悪魔祓い」についての宗教学的考察』では、日本においてキリスト教「悪魔祓い」が行われていることを明らかにした。また、その特徴と実態と構造を考察した。しかし、このような考察は、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」のそれについて明らかにしたものの、他の宗教における救済方法とそれを比較して論じるまでには至らなかった。このことは、前述のとおりである。過去の研究においても、そのような研究はほとんど行われていない。また、日本におけるキリスト教「悪魔祓い」を研究していくうえで、これらのことを整理することは非常に重要であった。

そこで、このような課題を解決するために『日本のキリスト教と民間巫者の救済方法における相違点についての一考察』において、日本における民間巫者の救済方法を考察し、それがどのように行われるのかを整理した。その結果、それぞれの宗教は様々な方法を構築し、駆使しながら人々への救済を行っていることが明らかになった。

また、これらの宗教は、形式こそ違いがあるが、病気などの苦しみを持つ人びとを「救済」するために、それを行うということにおいて共通していること、また、地域の人びとにとって身近な存在であり、生活していくうえで、心の支え的な存在となっており、とくに医者に対応できなかった時などには、その存在は、有難いものとなっているということがわかった。

そして、何よりも、キリスト教の救済方法との相違点が、宗教者自身が特別な能力を持つことへの考え方と、神や超自然的な存在の救済の仕方についての考え方にあるということが明らかになった。

このことを踏まえて、今回の考察では、さらに考察を深めるべく、日本の伝統的宗教の救済方法を分析し、キリスト教のそれとの相違点を考察した。そして、その結果、伝統的宗教とキリスト教の救済方法の違いが、宗教者が自ら行うという方法を取るのか、超自然的な霊的存在に行ってもらおうという方法をとるのかにあるということが明らかになった。

民間巫者とキリスト教の救済方法を比較考察した時と同様に、それぞれの宗教は、異なる方法によって救済を行っているのだが、苦しんでいる人を救済するという目的において行われるという点において共通しているということがわかった。

しかし、キリスト教は、苦しんでいる人を救済するという目的で行われるという点では共通しているのだが、その結果が神のためになっていると考えることが、それらの宗教とは異なっている。このことから考えると、民間巫者とキリスト教の救済方法を比較考察した時にも述べたことではあるが、この日本において、キリスト教の救済は、独特な方法と考え方によって行われている、いわば異質なものであるのではないかと筆者は考える。

そして、そのことを確かめるために、さらに日本の宗教の救済方法を考察する必要がある。このことを踏まえて、今回は、戦後新しく興った宗教を取り上げ、その宗教者が行う救済の方法を考察

し、キリスト教との違いについて論じてみたい。

参考文献

- 青野太潮（2002）「救済」大貫隆（編）『岩波キリスト教辞典』岩波書店。
井上順孝（編）（2006）『神道』ナツメ社。
伊矢野美峰（2004）『CDブック 修験道－その教えと秘法－』大法輪閣。
梅原猛他（編）（1987）『密教小辞典講座密教第5巻』春秋社。
小松邦彰・冠賢一（編）（1987）『日蓮宗小事典』法藏館。
下中彌三郎（編）（1937）『神道大辞典』平凡社。
真野俊和（1986）「まじないの聖<総説>」萩原龍夫・真野俊和（編）『仏教民俗学体系2 聖と民衆』名著出版：357-366。
田丸徳善（1985）「救済」相賀徹夫（編）『日本大百科全書』6 小学館：723。
豊嶋泰國（2002）『図説憑物呪法全書』原書房。
中村元他（編）（1989）『岩波仏教辞典第二版』岩波書店。
福田亮成（編）（1987）『真言宗小事典』法藏館。
宮家準（編）（1986）『修験道辞典』東京堂出版。
――（1993）「仏教と修験道」仏教民俗学体系編集委員会（編）『仏教民俗学体系1 仏教民俗学の諸問題』名著出版：111-129。
――（2015）『修験道小事典』法藏館。
宮田登（1992）「俗信と仏教」宮田登・坂本要（編）『仏教民俗学体系8 俗信と仏教』名著出版：1-13。
茂木貞純（1994）「修祓」國學院大學日本文化研究所（編）（1994）『神道事典』弘文堂：237-238。
山折哲雄（1987）「祈禱」梅原猛他（編）『密教小辞典講座密教第5巻』春秋社：44。
――（1988）「すくい」下中直人（編）『世界大百科事典』15平凡社。
吉田恵子（1986）「日蓮宗の祈禱師と祈禱講－千葉県中山法華経寺の場合－」萩原龍夫・真野俊和（編）『仏教民俗学体系2 聖と民衆』名著出版：409-427。